

6/9 Thu.

第5回 川崎マチネーシリーズ  
ミュゼ川崎シンフォニーホール 14時開演  
KAWASAKI MATINÉE SERIES No. 5 / Muza Kawasaki Symphony Hall 14:00

指揮  
Principal Conductor  
チェロ  
Cello  
コンサートマスター  
Concertmaster

**セバスティアン・ヴァイグレ** (常任指揮者) -p.7  
SEBASTIAN WEIGLE  
**宮田 大** -p.8  
DAI MIYATA  
長原幸太  
KOTA NAGAHARA

**チャイコフスキー**  
TCHAIKOVSKY

**バレエ組曲〈くるみ割り人形〉** 作品71a [約24分] -p.11  
Ballet Suite "Nutcracker", op. 71a  
第1曲 小序曲  
第2曲 行進曲  
第3曲 こんべい糖の踊り  
第4曲 トレパック  
第5曲 アラビアの踊り  
第6曲 中国の踊り  
第7曲 あし笛の踊り  
第8曲 花のワルツ

**チャイコフスキー**  
TCHAIKOVSKY

**ロココ風の主題による変奏曲** 作品33 [約18分] -p.12  
Variations on a Rococo Theme op. 33

[休憩]  
[Intermission]

**ムソルグスキー (ラヴェル編)**  
MUSSORGSKY (arr. RAVEL)

**組曲〈展覧会の絵〉** [約35分] -p.13  
Suite "Pictures at an Exhibition"  
プロムナード - I. グノームス (こびと) - プロムナード  
II. 古城 - プロムナード  
III. テュイルリー (遊びの後の子供たちの喧嘩)  
IV. ビドロ (牛車) - プロムナード  
V. 殻をつけた雛鳥のバレエ  
VI. サムエル・ゴールドデンベルクとシュムイレ (金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)  
VII. リモージュ (市場)  
VIII. カタコンブ (古代ローマの地下墓地) - 死せる言葉による死者への呼びかけ  
IX. 鶏の足の上の小屋 (バーバ・ヤガー = 民話上の妖婆)  
X. キエフ (キーウ) の大門

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
協力：ミュゼ川崎シンフォニーホール (川崎市文化財団グループ)

6/16 Thu.

第652回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No. 652 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Principal Conductor  
ピアノ  
Piano  
コンサートマスター  
Concertmaster

**セバスティアン・ヴァイグレ** (常任指揮者) -p.7  
SEBASTIAN WEIGLE  
**マルティン・ガルシア・ガルシア** -p.8  
MARTÍN GARCÍA GARCÍA  
林 悠介  
YUSUKE HAYASHI

**ドヴォルザーク**  
DVOŘÁK

**交響詩〈真昼の魔女〉** 作品108 [約15分] -p.14  
Symphonic Poem "The Noon Witch", op. 108

**モーツァルト**  
MOZART

**ピアノ協奏曲 第23番** イ長調 K.488 [約26分] -p.15  
Piano Concerto No. 23 in A major, K. 488  
I. Allegro  
II. Adagio  
III. Allegro assai

[休憩]  
[Intermission]

**ドヴォルザーク**  
DVOŘÁK

**交響曲 第8番** ト長調 作品88 [約34分] -p.16  
Symphony No. 8 in G major, op. 88  
I. Allegro con brio  
II. Adagio  
III. Allegretto grazioso  
IV. Allegro ma non troppo

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会

6/21 Tue.

第618回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.618 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Principal Conductor  
コンサートマスター  
Concertmaster

ルディ・シュテファン  
RUDI STEPHAN

[休憩]  
[Intermission]

ブルックナー  
BRUCKNER

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.7  
SEBASTIAN WEIGLE  
小森谷 巧  
TAKUMI KOMORIYA

管弦楽のための音楽 (1912年) [約19分] -p.18  
Music for Orchestra (1912)

交響曲 第7番 ホ長調 WAB 107 (ノヴァーク版)  
[約64分] -p.19

Symphony No. 7 in E major, WAB 107 (Nowak edition)  
I. Allegro moderato  
II. Adagio: Sehr feierlich und sehr langsam  
III. Scherzo: Sehr schnell  
IV. Finale: Bewegt, doch nicht schnell

6/25 Sat.

第248回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.248 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

6/26 Sun.

第248回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.248 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮  
Principal Conductor  
ファゴット  
Bassoon  
コンサートマスター  
Concertmaster

ワーグナー  
WAGNER

モーツァルト  
MOZART

[休憩]  
[Intermission]

ベートーヴェン  
BEETHOVEN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.7  
SEBASTIAN WEIGLE

ロラ・デクール -p.9  
LOLA DESCOURS

長原幸太  
KOTA NAGAHARA

歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲 [約12分] -p.21  
"Der Fliegende Holländer" Overture

ファゴット協奏曲 変ロ長調 K.191 [約20分] -p.22  
Bassoon Concerto in B flat major, K. 191

I. Allegro  
II. Andante ma adagio  
III. Rondo: Tempo di menuetto

交響曲 第7番 イ長調 作品92 [約36分] -p.23  
Symphony No. 7 in A major, op. 92

I. Poco sostenuto -Vivace  
II. Allegretto  
III. Presto  
IV. Allegro con brio

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

音楽は逆境にあっても  
変わることのない恵みを  
もたしてくれます  
世の中が萎縮している今こそ  
それを強く感じます

# 今こそ音楽を！



2021年度公演の様相（上：2022年2月20日、東京芸術劇場 下：2022年3月8日、サントリーホール）©読響

今回のコロナ禍に際し、多くの皆様がその活動において困難な状況におかれている中、私ども公益財団法人 読売日本交響楽団は公益社団法人 日本オーケストラ連盟加盟団体の一員として三菱UFJフィナンシャル・グループ様より多額のご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。

このたびの危機を乗り越え、未来に向けてオーケストラの音楽を皆様に提供し続け、真に豊かな社会を築くことに貢献できるよう、今後の活動に励んでまいります。

公益財団法人 読売日本交響楽団

指揮

セバステアーン・ヴァイグレ  
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

さらなる飛躍へ！  
名匠が3つの  
傑作交響曲を指揮



©読響

コロナ禍でも読響との充実した演奏で、評価を得ているドイツの名匠ヴァイグレが、6月公演に登場！ ブルックナー、ベートーヴェン、ドヴォルザークの傑作交響曲や、ムソルグスキーの〈展覧会の絵〉などバラエティに富んだプログラムを指揮する。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで90年代後半から本格的に指揮をはじめた。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げ、評判を呼んだ。07年から11年までパイロイト音楽祭にて、ワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉を指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務める。11年に同歌劇場管が『オーパヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年、18年、20年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。これまでに、メトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭にも出演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団を指揮するなど、国際的に活躍している。読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR. シュトラウス〈サロメ〉(第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞)、昨年2月のワーグナー〈タンホイザー〉などで共演し、いずれも好評を博した。

6/9  
川崎マチネー

6/16  
名曲

6/21  
定期

6/25  
土曜マチネー

6/26  
日曜マチネー

Maestro

6/9

川崎マチネー

Artist



チェロ

**宮田 大**

DAI MIYATA, Cello

日本を代表するチェリストとして国際的に活躍する俊英。1986年宇都宮市生まれ。スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。2009年、ロストロポーヴィチ国際コンクールで日本人として初めて優勝。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの支持が厚く、世界的指揮者・小澤征爾にも絶賛された。これまでに著名な指揮者や楽団と多数共演するほか、クレーメル、バシュメット、ヴェンゲーロフら名匠と共演。演奏活動の他、国際チェロ・コンクールの審査員としても招聘されている。メディアでも「ららクラシック」「題名のない音楽会」「徹子の部屋」などに出演。使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1698年製A.ストラディヴァリウス“シャモニー”。読響とは2010年の初登場以来、数多く共演している。

6/16

名曲

Artist

昨年のショパン国際ピアノ・コンクールで、世界を魅了した新星マルティン・ガルシア・ガルシアが、読響に初登場。1993年スペイン生まれ。5歳からピアノを始め、マドリードのレイナ・ソフィア音楽学校を卒業、ソフィア女王から最優秀学生賞を受ける。その後、ニューヨークのマネス音楽院で研鑽を積み、修士号を取得。これまでも数々の国際コンクールで第1位を獲得しており、2021年8月にはクリーヴランド国際コンクールで優勝。同年10月のショパン国際ピアノ・コンクールで第3位に入賞、最優秀協奏曲賞も受賞し、音楽へのひたむきな姿勢やユニークな解釈、陽気なキャラクターで一躍脚光を浴びる。現在、欧米各地でコンサートを開催しており、高い評価を受けている。ニューヨークに在住し、J.ローズに師事。



©GRZEDZINSKI

ピアノ

**マルティン・ガルシア・ガルシア**

MARTÍN GARCÍA GARCÍA, Piano



©PIERRE DUGOWSON

ファゴット

**ロラ・デクール**

LOLA DESCOURS, Bassoon

甘くまるやかな音色で聴衆を魅了し、ファゴット界に革新をもたらすフランスの名手。ランス生まれ。パリ音楽院で学び、2009年にバーミンガムでの国際ダブルリード協会ヤング・アーティスト・コンクールで優勝。19歳でパリ管に入団し、17年からフランクフルト歌劇場管のソロ・ファゴット奏者を務めている。19年にはチャイコフスキー国際コンクールで第4位に入賞し、注目を浴びた。ロイヤル・コンサートヘボウ管やマーラー室内管、ロンドン・フィル、バンベルク響などにも客演。18年から木管トリオ「コクトー・トリオ」のメンバーを務めるなど、室内楽でも活躍。劇やダンスなど他の芸術分野にも大きな関心を持ち、ジャンルを超えた企画に参加。新作の委嘱・録音なども積極的に行っている。今回、読響に初登場。

6/25

土曜マチネー

6/26

日曜マチネー

Artist

## チャイコフスキー

### バレエ組曲〈くるみ割り人形〉 作品71a

〈くるみ割り人形〉(全2幕)は、ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840~93)が最晩年に残した、〈白鳥の湖〉〈眠りの森の美女〉に続く三大バレエの第3弾。1891~92年、ペテルブルクのマリインスキー劇場の依頼で作曲され、1幕物の歌劇〈イオランタ〉と共に初演された。原作はドイツの作家E.T.A.ホフマンの〈くるみ割り人形とねずみの王様〉だが、本作ではフランスのデュマ・フィスによる翻案版が用いられ、さらに音楽は同劇場の首席振付師プティバの台本に沿って書かれている。

物語は「少女クララがクリスマス・イヴにくるみ割り人形をもらう。人形は彼女の夢の中で王子に変身。ねずみとの戦いで王子を救ったクララはお菓子の国に招待され、様々な踊りの歓迎を受ける」といった楽しいファンタジー。それゆえクリスマス・シーズンの定番演目となっている。また音楽自体もすこぶるチャーミングで美しく、巧みな楽器法をはじめ、作曲者の円熟ぶりが如実に示されている。

今回演奏されるのは、演奏会用の新作が必要となったチャイコフスキーが、全曲完成前に自ら編んで初演した、全8曲の組曲版。これも一つの定番となっている。**小序曲**：低音楽器が用いられていない軽やかな音楽。**行進曲**：子供たちがクリスマスツリーを前に踊る軽快で歯切れ良いナンバー。**こんぺい糖の踊り**：チャイコフスキーによって史上初めてオーケストラで使用されたチェレスタの響きが効果をあげる幻想的な音楽。**トレバック**：題名はロシアの農民の踊り。エネルギーで短い1曲。**アラビアの踊り**：東洋風のエキゾチックな音楽。**中国の踊り**：低音の刻みに乗ってフルートが活躍するコミカルなナンバー。**あし笛の踊り**：3本のフルートの弾んだ動きが際立つ爽やかな佳品。**花のワルツ**：ホルンの響きが印象深い、本作の看板曲。緩やかな序奏に始まり、美しいハーブ・ソロを経て、夢幻的なワルツが展開される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1891~92年/初演：1892年3月19日(組曲版)、同年12月18日(バレエ)、共に Санктペテルブルク/演奏時間：約24分

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル、タンブリン、グロッケンシュピール)、ハープ、チェレスタ、弦五部

## チャイコフスキー ロココ風の主題による変奏曲 作品33

1876年12月から1877年1月にかけて作曲された、チャイコフスキーの“チェロ協奏曲”に相当する作品。単一楽章の変奏曲ながら、チェロの協奏作品の中でも最上位クラスの人気を得ている。書かれたのは、ピアノ協奏曲第1番(1875)、バレエ〈白鳥の湖〉(1876)と、交響曲第4番やヴァイオリン協奏曲(1878)の間という、生涯最初の充実期にあたる。モスクワ音楽院の教授(すなわちチャイコフスキーの同僚)だったドイツ出身のチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンのために作曲され、1877年11月に初演された。「ロココ」とは、18世紀フランスのルイ15世の宮廷から始まった、バロックに続く美術様式で、ここでは宮廷的で優美な趣を意味している。

だがこの曲、初演前にフィッツェンハーゲンが独奏パートを変更した上、無断で第8変奏をカットし、変奏の順番も大幅に入れ替えた。しかもそのまま出版がなされ、なぜかチャイコフスキーも復元しなかったことから、フィッツェンハーゲンの改変版によって普及していった。なお、20世紀半ばにオリジナル譜が復元され、実際に演奏される機会も徐々に増えてきてはいる。ただし本日は、一般に馴染み深いフィッツェンハーゲン版で演奏される。

曲は、主題と7つの変奏が、緩急の変化を伴った多彩な楽想とともに展開される、繊細で叙情的な音楽。ソリストには高度な技巧と高音域でのこまやかな表現が求められる。

短い序奏(モデラート・クワジ・アンダンテ、イ長調)の後、チェロが優美な主題(モデラート・センブリーチェ)を呈示。第1、第2変奏では主題が細かく刻まれ、第3変奏(アンダンテ・ソステヌート)では美しい歌がたつぷりと奏される。ここは白眉ともいえる部分。民俗的な第4変奏(アンダンテ・グラツィオーソ)、フルートの旋律をチェロが装飾する第5変奏(アレグロ・モデラート)からカデンツァを経て、哀愁漂うニ短調の第6変奏(アンダンテ)へ。そして快活な第7変奏とコーダ(アレグロ・ヴィーヴォ)で華麗に締めくくられる。 (柴田克彦 音楽ライター)

作曲：1876～77年／初演：1877年11月30日、モスクワ／演奏時間：約18分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏チェロ

## ムソルグスキー (ラヴェル編) 組曲〈展覧会の絵〉

ロシアの国民楽派「5人組」の一人、モデスト・ムソルグスキー(1839～81)は、1874年1月、若くして亡くなった親友で画家・建築家ヴィクトル・ハルトマンの遺作展を見た。そこで感銘を受けた彼は、絵の印象に基づく音楽の創作を決意。異例の集中力を発揮し、同年7月にピアノ組曲〈展覧会の絵〉を完成した。だが生前には日の目を見ず、没後5年を経た1886年によようやく出版。そして1922年、近代フランスの大家モーリス・ラヴェル(1875～1937)による管弦楽版が出され、大人気レパートリーとなった。

曲には、場内の移動を表わす「プロムナード」を随時挟んで10枚の絵が登場。原曲の生き生きした描写と、“管弦楽の魔術師”の色彩的な楽器法を併せ持つ音楽が、華やかに展開される。

**プロムナード**：トランペットのソロに始まり、楽器を増していく。**グノームス**：地底の宝を守るこびとのグロテスクな姿。**プロムナード**：最初よりも穏やか。**古城**：イタリアの古い城。サクソフォンがもの哀しい旋律を歌う。**プロムナード**：少し重め。**テュイルリー**：パリの公園で遊ぶ子供たちを描いた、めまぐるしい音楽。**ピドロ**：ポーランドの牛車の重い足取り。**プロムナード**：木管で優しくに奏される。**殻をつけた雛鳥のバレエ**：生まれだての雛鳥のユーモラスな動き。**サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ**：尊大な金持ちと、彼にお金を求める貧しい人(共にユダヤ人)が、重い旋律と弱音器を付けたトランペットによって対比される。**リモージュ**：フランスの市場での休みないおしゃべり。**カタコンブ**：古代ローマの地下墓地。不気味なハーモニーの後、「死せる言葉による死者への呼びかけ」と題された部分へ移り、プロムナードが変奏される。**鶏の足の上の小屋**：ロシア民話の妖婆が住む小屋。叩き付けるような激しい音楽。**キエフ(キーウ)の大門**：壮麗なクライマックス。 (柴田克彦 音楽ライター)

作曲：1874年／初演：1922年10月19日、パリ(ラヴェル編)／演奏時間：約35分  
楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、鞭、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、チャイム)、ハーブ2、チェレスタ、弦五部

## ドヴォルザーク

## 交響詩〈真昼の魔女〉 作品108

〈真昼の魔女〉という曲名に違和感を覚える方も多いのではないだろうか。魔女といえば夜に現れそうなものだが、なぜ真昼なのか。それには理由がある。原題は〈ポルードニツァ〉。ポルードニツァはスラヴ圏の神話に伝わる悪魔で、大鎌を持ち、白い服を着た若い女性として描かれる。暑い真昼に姿を現して戸外で働く者を襲ったり、子供をさらったりする。つまり、この魔女は熱中症の擬人化のような存在で、日差しが強い日に長く屋外にいてはいけないと戒めているのだ。

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）はボヘミアの詩人カレル・ヤロミール・エルベンに詩集〈花束〉に収められた〈ポルードニツァ〉に触発されて、この交響詩を作曲した。ここで描かれる魔女は熱中症よりもさらに恐ろしく、むしろゲーテの「魔王」を連想させる邪悪な存在だ。母親は気難しい子供に対して、言うことを聞かないと真昼の魔女がやってくると脅かしたところ、本当に魔女がやってきて悲劇的な結末に至る。

曲は4つの部分からなる。**第1部**はどこかユーモラス。木管楽器によるのどかな主題で開始される。子供は行儀よく遊んでおり、母親は家事に勤しんでいる。やがて子供がわがママを言いだし、母親は叱る。家庭の日常が描かれる。**第2部**は不気味だ。静かにざわめく弦楽器にバスクラリネットとファゴットが下行音型で魔女の主題を重ねる。緊迫した曲想が真昼の魔女の到来を告げる。**第3部**はスケルツォ風。子供を奪おうとする魔女に母親が激しく抵抗する。やがて母親は力尽き、鐘の音が正午を告げる。**第4部**で父親が昼食のために帰ってくる。父親は楽しげな調子で登場するが、すぐに異変に気づく。母親は気絶して倒れており、その胸に絶命した子が抱かれている。強奏による<sup>どうごく</sup>慟哭に魔女の主題が重なる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1896年／初演：1896年11月21日、ロンドン／演奏時間：約15分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、チャイム、シンバル、大太鼓）、弦五部

## モーツァルト

## ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488

1786年、ウィーンで絶大な人気を誇っていたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は30歳を迎える。2か月後にオペラ〈フィガロの結婚〉の初演を控えた3月に、ピアノ協奏曲第23番イ長調が書きあげられた。同時期に書かれただけあって、この曲にはどこか〈フィガロの結婚〉にも通じる絶頂期の創作者ならではの筆の勢いと伸びやかさが感じられる。

作品はピアノ協奏曲第22番および第24番とともに、四旬節の演奏会のために作曲されたと推定される。傑作ぞろいのモーツァルトのピアノ協奏曲のなかでも屈指の人気を誇るが、楽譜が出版されたのは作曲者が世を去ってから。モーツァルトの遺産を未亡人コンスタンツェから購入したヨハン・アントン・アンドレが1800年に出版している。

オーケストラの編成はオーボエを欠き、代わって当時の新興楽器であったクラリネットが使用されている。作曲者ウィーン時代のピアノ協奏曲としては珍しくトランペットとティンパニが用いられておらず、祝祭性よりも室内乐的な親密さが前面に押し出されている。

**第1楽章** アレグロ オーケストラが優美でしなやかな主題を奏で、これに独奏ピアノが応答する。終結部の前に作曲者自身によるカデンツァが書き記されている。

**第2楽章** アダージョ 明るい前楽章から一転して、憂いを帯びた楽想が陰影豊かに綴られる。引きずるようなシチリアーノのリズムが特徴的。

**第3楽章** アレグロ・アッサイ ジャンプするような独奏ピアノの主題で勢いよく開始され、はつらつとした楽想がくりひろげられる。スピード感あふれる華麗なパッセージに喜びが横溢する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1786年／初演：1786年、ウィーン／演奏時間：約26分  
楽器編成／フルート、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

## ドヴォルザーク

## 交響曲 第8番 ト長調 作品88

「あいつがゴミ箱に捨てたスケッチだけでも一曲書けそうだ」とは、ドヴォルザークの卓越したメロディメーカーぶりを称えたブラームスの言葉。ブラームスはいち早くドヴォルザークの才能を認め、ベルリンの出版業者ジムロックに対して彼を推薦した。おかげでドヴォルザークは〈スラヴ舞曲集〉で大きな成功を収め、名声をヨーロッパに広めることになる。以来、ジムロックはドヴォルザークと協力関係を続け、作品の出版に尽力した。

ところが、次第に両者の関係に溝が生まれてしまう。売れ行きのよい小品や歌曲を求めるジムロックと、交響曲のような大作に創作のエネルギーを注ぎ込みたいドヴォルザーク。交響曲第7番は〈スラヴ舞曲集〉の続編を書くことを条件にかろうじて出版できたが、いよいよ交響曲第8番で両者の思惑は平行線をたどる。「大規模な作品は売れない」と不十分な報酬しか提示できなかったジムロックに対して、すでに作曲家として自信を深めていたドヴォルザークはついに首を縦に振らなかった。売れ筋商品を求める出版社と芸術的な高みを目指す創作者という両者の立場の違いは、なんら現代の事情と変わるものではない。結局、交響曲第8番はイギリスのノヴェロ社から出版されることとなった。かつてこの曲が「イギリス」の愛称で呼ばれていたのは、このような出版事情を反映している。

**第1楽章** アレグロ・コン・ブリオ 哀愁を帯びたチェロの主題で開始される。フルートが楽しげな主題を奏で、熱気に満ちた楽想が展開される。

**第2楽章** アダージョ 柔和でひなびた<sup>かんじょ</sup>緩徐楽章。木管楽器の小鳥がさえずる。

**第3楽章** アレグレット・グラツィオーソ メランコリックなワルツ。

**第4楽章** アレグロ・マ・ノン・トロppo 楽天的なファンファーレで開始され、主題と変奏が続く。次々と表情を変えながら、力強いクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、プラハ／演奏時間：約34分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

## ルディ・シュテファン 管弦楽のための音楽 (1912年)

ルディ・シュテファン (1887～1915) は、独ライン地方の小都市ヴォルムスの有力者の家庭に生まれた。父親が関係する地域の会などで音楽に親しみ、1904年までには作曲も始めている。その後、フランクフルト、ミュンヘンに学び、11年、父親の支援を受けて開いたミュンヘンでの公開演奏会で注目を集めた。〈管弦楽のための音楽〉は、これをきっかけに精力的な創作活動に入ったシュテファンの最も成功した作品で (1910年にも同名の別作品がある)、13年の初演後、ショット社との出版契約や歌劇〈最初の人々〉のフランクフルト初演が決まるなど、シュテファンは次世代作曲家のトップランナーとみなされるようになる。しかし第一次世界大戦で東部戦線へと送られ、28歳で戦死した。

標題性や伝統的な形式感を持たないために、シュテファンの創作は第一次世界大戦後に流行する新即物主義の先駆のように語られることもあるが、作風は後期ロマン派の延長に位置づけられよう。本作は暗鬱な気分が葛藤や夢幻の境地を経て解放へと向かうプロセスを、主要主題を緊密に結び付けながら描いている。

序奏部は低弦が奏する重苦しい主題aを繰り返して高まっていく (ゆっくりと消沈して：スコアの表記。以下同)。速度を増し (生き生きと)、ヴァイオリンに勇壮な主題b、さらにはその派生旋律がトランペットに現れ、テーマを組み上げながら頂点で主題aを再現する (幅広く)。静寂の中で主題aを弱音器付きのトロンボーンが、続いて弦が繰り返すと、ヴァイオリン・ソロが7度の跳躍ではじまる美しく神秘的な主題cを出す。この主題は木管楽器が先導するフーガへと展開され (生き生きと)、主題bの諸要素を絡ませつつ高潮する。総休止の後、ゆったりした気分の中で主題cが徐々に反復され (ゆっくりと)、結尾では (生き生きと) 木管と弦の煌びやかな装飾の中で、金管楽器の凱歌が響き渡る。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1912年／初演：1913年、イエーナ／演奏時間：約19分  
楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3 (バスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、トライアングル、銅鑼、グロッケンシュピール、サスペンデッド・シンバル)、ハープ、弦五部

## ブルックナー 交響曲 第7番 ホ長調 WAB 107 (ノヴァーク版)

1881年、57歳の誕生日の前日に交響曲第6番を完成したアントン・ブルックナー (1824～96) は、同じ月のうちに第7番第1楽章のスコアに取り掛かっている。まず翌年10月にスケルツォ楽章が完成し、年末までには第1楽章も終了。83年の1月にはアダージョ楽章のスケッチも終えたが、この頃にはブルックナーは尊敬するワーグナーの死を予感しており、2月に訃報が届いた際には、この楽章にチューバによる葬送の歌が加えられた。アダージョが4月に完成した後、フィナーレは夏の間に進められ、1883年、59歳の誕生日の翌日に全曲が完成している。

リンツ大聖堂のオルガニスト職をなげうってウィーンに進出して以来、すでに15年の月日が流れていたが、その創作の革新性は未だ無理解に阻まれていた。動いたのは弟子たちだった。84年1月にワーグナー協会の名誉会員にブルックナーが推挙されたタイミングを狙い、ウィーンのベーゼンドルファー・ザールではシャルク兄弟 (ヨーゼフ、フランツ) やフェルディナント・レーヴェが交響曲第4、1、7番のピアノ試奏を行っている。彼らの働きかけに反応したのはライブツィヒの劇場の楽長職にあったアルトゥール・ニキシュだった。とはいえ、こちらも何度も障害にぶつかっている。当初指揮するはずだったレーヴェが病に臥せってしまい、ニキシュ自身がタクトを取ることとなったが、何度も先延ばしになり、第7番の初演が実現したのは年の瀬も迫った12月30日だった。しかし楽章が終わるごとに拍手が増え、カーテンコールに現れた作曲家に月桂冠が贈られるほどの成功裡に終わった。

翌85年3月にはヘルマン・レーヴィがミュンヘン初演を行った。前年のバイロイトでブルックナーはレーヴィにこの曲を売り込んでいたのだ。練習段階では反発もあったようだが、結局こちらも嵐のような喝采で迎えられた。この演奏会はワーグナー像の建立のためのものだったが、翌日の追悼の催しで、アダージョの葬送の歌が演奏された時には涙が止まらなかった、とブルックナーは述べている。7作目にしようやく交響曲作曲家として認められた自らの歩みも重なり、様々な思いがこみあげたのだろう。

バイエルン国王ルートヴィヒII世への献呈も許された第7番は、その後、国際的に広く受け入れられていく。同年5月にはカールスルーエ (アダージョのみ)、翌年

にはケルン、ハンブルク、グラーツについて、ブルックナーに冷たかった地元ウィーンでも演奏された。11月には海を越えてニューヨークでも初演されている。動かなかった厚い壁が、次々と開いていったのである。

**第1楽章** アレグロ・モデラート しじまに響く弦のトレモロの中、チェロとホルンが分散和音からなる伸びやかな第1主題を歌う。オーボエとクラリネットが歌いだす第2主題は、ターン（回音）を含んだ流麗な旋律。第3主題は木管と弦のリズムの対比に特徴を持つ。展開部は第1主題の反行形をフォルティッシモで力強く提示して始まる。

**第2楽章** アダージョ 極めて厳かに、極めて遅く ワーグナーの死の予感のうちに書かれた楽章で、ワーグナーチューバの暗鬱な歌に弦が深々と応答して始まる。低音金管群の重い足取りに続いて弦に現れる第2主題は穏やかな慈しみの表情を湛えている。クライマックスでは第1主題を高らかに歌った後に、チューバ群が葬送の旋律を奏で、長い余韻を残して閉じる。

**第3楽章** スケルツォ 極めて速く 三部形式のスケルツォ部に、同じく三部形式のトリオが続く。スケルツォ部は弦の反復音型の上にトランペットが主題を提示し、中間部はこの主題の反行形を中心に構成される。用いられる素材は限られ構成も単純だが、一つ所にとどまらず変化に富んでいる。トリオは田園調の緩やかな気分を歌う。

**第4楽章** フィナーレ 動きをもって、しかし速くはなく 跳ねるようなヴァイオリンの第1主題は、第1楽章冒頭主題から導かれている。第2主題はハーモニーが美しいコラル風のもの。第3主題は第1主題から派生した力強い旋律である。結尾部で再現される冒頭主題が全体の統一感を生んでいる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1881～83年／初演：1884年12月30日、ライプツィヒ／演奏時間：約64分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、ワーグナーチューバ4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部

## ワーグナー

### 歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲

1839年3月、リヒャルト・ワーグナー（1813～83）は、バルト海に面した港町リガ（現ラトヴィア共和国の首都）の音楽監督の職を解雇された。不当な処遇に不満を持ちながらも、まだ20代だったワーグナーは、それを好機と捉え、栄光の都パリに移ることを決意した。結局、債務で首が回らなくなり、同年7月に夜逃げ同然で妻とともにリガを後にするが、友人の手引きで、ロンドン行きの小さな帆船に乗り込んだ。航海中、何度も嵐に見舞われ、ノルウェー南岸のフィヨルドに避難することもあった。荒れた海上の様子や「巨大な花崗岩（かこうがん）の絶壁にこだまする水夫たちのかけ声」など、死をも覚悟したこのときの経験は、ワーグナーの創作を刺激したに違いない。〈さまよえるオランダ人〉の台本執筆は、1840年から始まるが、同時代の詩人ハイネの小説「フォンシュナーベレヴオブスキー氏の回想」の幽霊船の伝説に着想を得たこの台本に、嵐の航海も少なからず影響を与えたはずだ。

嵐とともに永遠に海を彷徨い続けるオランダ人がやってきた。この男を呪われた運命から解放できるのは、永遠の愛を捧げる乙女だけ。船長の娘ゼンタは海に身を投げ、オランダ人の魂は救済された。1841年に台本が完成、夏から全体の作曲に着手する。ここでは旧来の、曲と曲が分けられる番号形式で書かれているが、次作の〈タンホイザー〉以降と同様に、音楽は切れ目なく続いていく。伝統を受け継ぎながら、後に進化させる様々な要素（愛による救済、ライトモチーフ、自然描写など）がすでに現れている野心作で、ワーグナーはパリ・オペラ座での初演を熱望したが、その夢は叶わなかった。

序曲（アレグロ・コン・プリオ）は弦楽器のトレモロに導かれて、ホルンとファゴットが咆哮する「オランダ人の動機」が現れる。嵐のなかをさすらう幽霊船を思わせる衝撃的な開始である。この動機と穏やかな「救済の動機」と対比させ、陽気な「水夫の合唱の動機」などをはさみ、物語の舞台と背景を力強く提示する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1840～41年／初演：1843年1月2日、ドレスデン／演奏時間：約12分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部

6/25

土曜マチネー

6/26

日曜マチネー

Program Notes

## モーツァルト

## ファゴット協奏曲 変口長調 K.191

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の管楽器協奏曲には、ファゴット、フルート、オーボエ、クラリネット、ホルンのためのものがあるが、ファゴット協奏曲変口長調は、散逸したトランペット協奏曲や〈カッサシオン〉K.100(62a)のコンチェルト楽章を除けば、管楽器のために書いた初めての協奏曲である。

1783年夏、モーツァルトは、父親とともに3回目のウィーン旅行に出発した。今回も就職先を求めて出かけたが、滞在中、女帝マリア・テレジアに拝謁し、6曲の弦楽四重奏曲(K.168~173)を作曲するなどのトピックはあったものの、就職に結び付くことはなかった。結局、2か月ほどで帰郷し、翌年12月からのミュンヘン旅行まではザルツブルクの宮廷音楽家として職務に勤しんだ。ミサ曲等も手がけたが、交響曲第25番や第29番など、器楽曲が集中して書かれた。ファゴット協奏曲もそのひとつで、ザルツブルクの宮廷音楽会用の作品と考えられるが、詳細は明らかではない。ファゴット協奏曲としては、その後、1785年にミュンヘンで音楽愛好家の男爵のために3曲書いたことが知られるが、それらは消息不明のため、本作は現存する唯一のファゴット協奏曲である。青年らしい明るさと洗練とした雰囲気を持ち、音程の跳躍や歌うような旋律などファゴットの特性が盛り込まれ、この楽器のレパートリーを代表する名曲となっている。

**第1楽章** アレグロ まずオーケストラで快活な第1主題、軽やかに跳躍する第2主題が提示された後、ファゴットが登場する。独奏楽器の技巧に重点を置いた展開部を経て、再現部、カデンツァと続く。

**第2楽章** アンダンテ・マ・アダージョ 歌劇〈フィガロの結婚〉の伯爵夫人のアリアを思わせる美しい旋律が歌われる緩徐楽章。ここでもカデンツァが指定される。

**第3楽章** ロンド、テンポ・ディ・メヌエット 典雅なロンド主題が5回現れ、その間でファゴットの技巧的なパッセージが繰り返される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1774年6月4日(完成)／初演：不明／演奏時間：約20分  
楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏ファゴット

## ベートーヴェン

## 交響曲 第7番 イ長調 作品92

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)にとって、1808年初演の〈運命〉と〈田園〉以来の交響曲となる第7番は、1813年1月に完成した。これほどの期間、交響曲の創作から離れていたのは、社会情勢の変化で貴族からの年金が打ち切られたり、情熱的な手紙が残されている「不滅の恋人」との叶わぬ恋など、作曲家自身が人生の転機にあったこととも関係しているだろう。さらに創作において新たな局面を開くためには、作曲語法の開拓や発想の転換に加え、それを熟成させていく時間も必要だった。

これまでのベートーヴェンの交響曲では、動機あるいは楽想といった小さな単位を徹底的に組み合わせる音楽を構築していたが、ここではその方法を破棄して、まとまりのある旋律を主題として用いることにした。それによって主題は、「カンタービレな(歌うような)性格」を帯びるが、ベートーヴェンは、ただ旋律の美しい流れに音楽を任せるのではなく、交響曲に欠かせない構築性を保つために、第7番ではリズムを前面に出して、音楽的な緊張感と力動感を生み出した。4つの楽章は、それぞれ特徴的なリズムをもち、リズム動機によって音楽全体が統一されている。

**第1楽章** ポーコ・ソステヌート〜ヴィヴァーチェ ゆったりとした序奏部に続いて、フルートとオーボエによるリズム動機が強調された後、ソナタ形式の主部に入る。

**第2楽章** アレグレット 葬送行進曲風のリズムが穏やかに反復する。

**第3楽章** プレスト スケルツォ的な性格の楽章で、軽快な部分と美しい旋律が歌われる部分が対比される。

**第4楽章** アレグロ・コン・プリオ ワーグナーが「舞踏のアポテオーゼ(神格化)」と評したように、リズムの饗宴とも言える華やかな楽章。アイルランド民謡に由来する第1主題を中心に高まり、最後は管楽器の咆哮を合図に燃え上がる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1811~13年／初演：1813年12月8日、ウィーン／演奏時間：約36分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

6/25

土曜マチネー

6/26

日曜マチネー

Program Notes